

パラオ国花　RUR

Alli！パラオ通信

NO.　5
2026.11 月
発行　二瓶篤子

◇パラオ未来展望編◇

パラオから学ぶことはたくさんありました。国土を外国人には売り渡せないよう法律で決めパラオ人ファーストの考え方が徹底しています。環境保護の推進力も次のとおりです。

“手つかずの自然”（プリスティンネイチャー）

これは、パラオの公式観光スローガンです。「観光立国」として世界中から高く評価されているパラオ。国として、政策に４つの柱を立てて、サステナブルな自然を守ろうと努めています。

１．伝統慣習“ブル（Bul）”の風習

これは、海洋資源の回復力を待つしくみです。パラオには、古くから首長（チーフ）が発令する「ブル（Bul）」という伝統的な資源管理の風習があります。これは、特定の海域での漁獲量が減った時に、一定期間その場所での漁を全面的に禁止し、自然の回復力を待つ仕組みです。

現代のパラオ政府はこの知恵をもとに領海の８０％を全面禁漁区としているのです。まさしく伝統と科学の融合です。

２．世界初の入国義務「パラオ誓約（パラオ・プレッジ）」の制度化

２０１７年から、パラオに入国するすべての観光客は、パスポートに押される環境保護の誓約スタンプへ署名義務があります。「パラオの子供たちのために、自然を傷つけず、足跡以外は残さない」と誓うのです。これに違反すると、最大 10,000 ドルの罰金が科されます。単なるマナー啓発ではなく、環境保護への本気度が見える制度です。

３．法律で守るエコツーリズム

観光客の行動や持ち込み品に厳しい制限を設けて「手つかずの自然」を守ろうとしています。

① サンゴに有害な物質（オキシベンゾンなど）を含む日焼け止めの販売・持込を世界で初めて法律で禁止しました。
② 入国する外国人観光客から１００ドルの環境税を徴収し国内の「保護区ネットワーク」の維持管理や監視員の雇用などに充てています。

４．地域社会と自然の共生のプログラム“オラウ・パラオ”

観光客を単なる「消費客」ではなく、「環境の守り手」として迎える「オラウ・パラオ」というプログラムを考え出しました。観光客が持続可能なローカルビジネスの利用や環境クイズへの参加をするとポイントがたまり、それに応じて通常では入れない聖地へのガイドツアーや地域コミュニティでの伝統文化体験ができるといったおまけ付きのしくみです。

“プリスティンネイチャーに資するパラオのごみ（廃棄物）政策”

パラオのごみ（廃棄物）政策の推進には政府はもとよりJICAや日本人が大きな貢献をしています。パラオ政府として、政策に４つの柱を立てて、２０１７年から２０２６年に渡って「国家固体廃棄物管理戦略」をとっています。

１．デポジット制（容器包装回収制度）

これは、飲料容器デポジット制度です。飲料缶、ガラス瓶、ペットボトルを輸入・販売する際にデポジット（預かり金）を上乗せしています。なので、消費者がこれらを回収所に持ち込むと、１本あたり５セントが返金される仕組みです。この仕組みによりポイ捨てが激減し、埋立地に行くはずだった廃棄物の多くが資源として回収されています。国民全体に浸透し、最も成功している施策となっています。

２．「ごみ」を付加価値に変えるアップサイクル

回収ごみの分別だけでなく島内で循環させる取組みを行っています。回収されたガラス瓶を砕き、琉球ガラスの技術に学んだ美しいコップやアクセサリーへ変えています。観光客向けのアート体験やおみやげ品が好評です。プラスチックを油に戻して油化発電することで吹きガラスの燃料にしています。コンポストによるエコ堆肥化も農業に貢献しています。

３．使い捨てプラスチックの厳格な規制

海洋プラスチックごみの削減に向け、法的な規制を非常に厳しくしています。

① レジ袋の禁止　国内での使い捨てプラスチック製レジ袋の輸入及びポリスチレン製の食品容器などの輸入や商業利用が厳しく禁止されています。

② 観光客への意識改革　ホテルや飲食店では、プラスチックでなく紙製品や植物由来の素材やリユース容器を使うよう義務付けられています。パラオ誓約もこの意識改革の一つです。

４．草の根の分別・回収体制への移行（日本の協力）

コロール州だけでなく各州やコミュニティを巻き込んだ「住民参加型」の草の根体制で分別収集するよう移行しています。

① 地域密着型の「分別ステーション」JICA 等の支援で地方でもごみを分別し排出できる拠点を整備しています。

② 意識改革　学校や婦人会、伝統的コミュニティを通じて「ゴミは混ぜればゴミ、分ければ資源」という意識改革を促す環境教育を展開しています。



「パラオの空と海、私」

パラオで２年間を過ごしながら、この国の歴史や文化、自然について少しずつ学んできました。その中で分かってきたのは、日本人が環境保全の中枢で貢献している事実でした。

我々は、国は違っていても同じ地球人です。かけがえのない地球を守り続けるために共に歩むことの大切さも学びました。自分にもできることはないかと考えている時に、JICA 草の根事業の環境教育モデル校として配属先小学校が選ばれました。「ゴミは分ければ資源」という意識改革を目指す環境教育にわずかながらでも貢献でき、よい思い出になりました。